

第1回北九州市地域コミュニティビジョン検討会議

1 開催日時 令和7年4月21日 18:30~20:20

2 開催場所 北九州市役所本庁舎 3 階特別会議室A
(北九州市小倉北区城内1番1号)

3 議題

(1)事務局説明

- ・北九州市地域コミュニティビジョン検討会議について
- ・座長選出について
- ・第1回検討会議について

(2)ゲストスピーカー講話

- ・「これからの地域コミュニティ」

株式会社 KITABA 代表取締役 酒本 宏 様

(3)意見交換

4 出席者氏名

〔構成員〕

多田 政博	若松区自治総連合会会長
日高 徹	西小倉校区まちづくり協議会会長
太田 康子	北九州市婦人会連絡協議会事務局長
古賀 由布子	Say!輪(セイリング)代表
西村 健司	一般社団法人 コミュニティシンクタンク北九州代表理事
勢一 智子	西南学院大学法学部教授
松永 裕己	北九州市立大学大学院マネジメント研究科教授
大熊 充	うきはの宝株式会社代表取締役
古賀 えみ子	一般社団法人北九州シニア応援団代表理事
中村 真理子	元市民センター館長
斉藤 磨希	Z 世代課パートナーズ

〔ゲストスピーカー〕

酒本 宏 株式会社KITABA代表取締役

5 議事概要 :配布資料に基づき事務局より説明、ゲストスピーカー講話、意見交換。

6 会議経過(発言内容)

地域振興課長

本日は大変ご多用の中、会議にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。私は会議の座長が選出されるまで進行役を務めさせていただきます、地域振興課長の上田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは初めに、お手元の配布資料の確認をさせていただきます。こちらをご覧くださいませ。会議次第が一枚目にごございます。次に配席表を、続きまして資料1「北九州市地域コミュニティビジョン検討会議について」、資料2「構成員名簿」、資料3「検討会議開催要綱」、資料4事務局説明資料「第一回検討会議について」、資料5「これからの地域コミュニティ」、ゲストスピーカーでございます酒本様にお話しいただく資料でございます。続きまして、資料6「今後の予定」というのを付けております。それから構成員の皆様から配付いただいております、アクティブシニア向け生活情報誌「さくら」と「シルバーがゴールドに輝くまち」と、左上にご提案と書かれました資料がお手元にお配りをしてもらったと思います。それから、構成員の皆様への委嘱書につきまして、机上に配布をさせていただきます。以上が配布資料でございますけれども、不足がございましたらお知らせください。

では、まず、開会にあたりまして、北九州市長武内和久よりご挨拶申し上げます。本日は申し訳ありません、公務出張のためビデオメッセージでご挨拶をさせていただきます。

北九州市長

皆さんこんにちは。北九州市長の武内和久です。北九州市地域コミュニティビジョン検討会議に、ご多忙中ご参加いただきまして心から御礼申し上げます。本日は東京へのお出張のため残念ながら会議への出席が叶いませんが、こちらのビデオメッセージでご挨拶させていただきます。

北九州市は、「一歩先の価値観を体現するグローバル挑戦都市」を目指し、経済成長と社会課題の解決を両立し、成長と幸福の好循環を作り出すことで、サステナブルに発展していく都市モデルの構築を目指しています。

そこで、令和7年度の柱の一つとしてサステナブルを掲げ、まちを支える地域コミュニティを新たなステージに進める一歩として、北九州市地域コミュニティ検討会議を開催することにしました。

今、地域では、自治会加入率の低下に伴い、担い手である役員の高齢化で今後の活動を継続できるかという不安がある、一人一人の負担が非常に重くなっているという課題があります。

全国的に、1人世帯や外国人移住者の増加、孤独・孤立、防犯・防災、介護、子育てなど地域が抱える課題は広がっておりまして、広がる地域課題・縮む地域コミュニティ、このギャップをどう埋めていくのかが大きな課題となっております。そのために、コミュニティの在り方をもう一回模索していきます。

この会議を通して、委員の皆様、地域コミュニティの未来像についてご議論いただきまして、その実現に向けた方向性を含む骨太の方針としてグランドデザインを描きたいと考えています。

そのためには、現状から進歩しながら持続可能性を取り戻していく、関係者の垣根を超えて協

働いていく、自走して動態的な取組、好循環を作っていくことが重要だと考えています。

北九州市は日本の中、世界の中の高齢化先進地であるとともに、住民自治の土台、そして日本全体の100分の1都市モデルという特徴をもっています。

地域の皆様としっかりと議論を重ねて、ビジョンを作り、新たな地域コミュニティモデルとして多様な主体による全世代参加型地域コミュニティの再構築を図ってまいります。

北九州市の掲げる「安らぐまち」の実現に向け、地域コミュニティの再構築は、本当に大事な課題、一つの私たちの使命です。ぜひ皆様の闊達なご議論をお願いいたしまして、私からのお礼のご挨拶とさせていただきます。どうぞ本日はよろしく願いいたします。

地域振興課長

続きまして、本検討会議の概要について、私の方からご説明をさせていただきます。

お手元の資料ないしは前の画面の方をご覧くださいませ。前の画面は、資料1を抜粋して掲載したものでございます。検討会議の概要についてご説明いたします。本検討会議の目的といたしましては、2040年の社会情勢を踏まえた新たな北九州市の地域コミュニティの将来のあるべき姿を定める方針「（仮称）北九州市地域コミュニティビジョン」と言いますが、その策定に関して意見を聴取させていただくため、「地域コミュニティビジョン検討会議」を設置することとしております。開催の期間は令和7年12月までを予定しております。また、議論の進行等によっては変更の可能性がございますけれども、その場合はまた事務局の方からご相談をさせていただきます。また、検討会議の意見につきましては、最終的には報告書の形にすることを予定しております。その報告書を踏まえまして、地域コミュニティビジョンを策定してまいりたいと考えてございます。

続きまして、お手元の資料2の方に構成委員の皆様の名簿をお配りさせていただいております。

続きまして、資料3の方には開催の要項をお配りしております。また、前の画面にはその中から抜粋して掲載しておきますけれども、まず座長の選出をさせていただきたいと思います。こちらの要綱ではですね、要綱で規定しております通り、座長には会議の議長役、それから構成員以外への出席依頼、また会議の公開・非公開の決定等を担っていただくこととしております。

選出に移らせていただきたいのですが、僭越ではございますけれども、事務局といたしましては、社会課題の解決に幅広い知見をお持ちの北九州市立大学の松永先生に座長をお願いできればと考えておりますが、皆様いかがでございましょうか。

<委員異議なし>

ありがとうございます。それでは、ここからの進行を松永座長をお願いいたします。

松永構成員（座長）

早速、議事に入りたいと思います。

まずは、「第一回検討会議について」の説明を事務局よりお願いします。

地域振興課長

私から、資料4「第一回検討会議について」を、カラーの横の資料に基づきまして、ご説明をしたいと思います。前の画面にも同じ画面を映しておりますので、お手元ないしは画面のいずれかを

ご覧ください。まずは事務局から、ビジョンの策定に向けた現状認識や課題認識、考え方についてご説明をさせていただきますが、こちらのご画面は市政全体のビジョンについてご説明したものでございます。市の基本構想におきまして、「稼げるまち」「彩りあるまち」「安らぐまち」の実現を重点課題として、重点戦略として続けております。市政変革ですとか財政の模様替えですとか、企業誘致等によって生み出された原資を投資に回して経済成長を生み、更なる投資の原資を生み出していくという「稼げるまち」の好循環を目指しております。また、その経済成長によって生まれた成果を生かしまして、文化、芸術、スポーツなどの「彩りあるまち」や子育て、防犯、防災、医療、介護等の「安らぐまち」を目指していくこととしております。この「安らぐまち」を目指していく上で、非常にポイントとなるのが地域コミュニティであると捉えております。北九州市におきましては、現在でも様々に地域活動が行われておりまして、コミュニティの支えとなっております。写真に4つお示しをしておりますが、雨の日でも登校時の見守りを行っていただいたり、その右には回覧板を回して情報交換を行っていただいたり、その右では消火器使って防火・防災に係る活動でありますとか、一番右のところは餅つきに係るイベントということで、様々な分野でご活動いただいているところでございます。

一方、地域コミュニティが抱える課題として、担い手の不足、それから高齢化という問題がございます。お示ししております3ページの資料でございますけれども、共働き世帯が増えておりまして、仕事を持った家庭で地域活動に参加しにくい世帯、そして共働き世帯がございますが、10年間で10%ほど世帯の数が増えていると。それから一般世帯という、施設に入っていらっしゃる方などを除いた世帯を一般世帯と呼びますけれども、そこに占める単身世帯の割合が、令和2年度で41%に至っているという現状がございます。

また、平成5年度には95%を超えておりました自治会加入率につきましても、令和5年には60.0%ということですので、30年間で約35%低下をしております。また、小学校区単位を基本として活動しております、まちづくり協議会の会長の皆様の平均年齢が約75歳ということで、従来の地域活動を担ってくださっておりました担い手が減少し、負担感の増大というのが進んでいるという現状がございます。担い手の減少、高齢化に伴いまして、地域を支えるコミュニティが模式図としては少し縮むという形の絵を描かせていただいておりますが、その一方で地域が抱えます課題は高齢化の進展でございますとか、外国人世帯の増加等々に伴いまして、課題は広がりつつあるという認識でございます。まさにこうした逆境を踏まえまして、時代の変化に対応できる地域コミュニティの在り方を模索すべき時期にあるという認識をしております。

この地域コミュニティの在り方を考えるにあたりましては、今後生じる様々な変化を捉えまして、中長期的な視点を持って検討していく必要があると考えております。そのため、検討の時点として2040年を設定いたしました。これは2040年頃に我が国の高齢化人口が最大となると見込まれていること、これに伴いまして、地域活動を担う人材確保という視点からは、一つのポイントを迎えるであろうと考えています。

また、本市におきましても高齢化率は約37%、生産年齢人口という15歳以上から65歳未満を指す言葉ですけれども、約42万人へと減少が見込まれております。一方で、AI等は近年目覚ましい進歩を遂げております。こうした新たなテクノロジーもコミュニティの在り方に影響を与えるものと考えられます。さらに医療技術の進展いかんでは、本格的に人生100年という時代も予想さ

れ、また、あわせまして健康寿命の延伸ということも可能となりましたら、現在の年齢の常識というものもまた変化している可能性が十分あるということが捉られております。こうした時代の変化にあった地域コミュニティを考えていく必要があると考えております。

こうした長期的な視点での検討は、国においても様々な分野で進められているところです。例えばお示ししておりますのは、内閣府の地方制度調査会の報告書でございます。この会は現行の地方制度全般を対象とした有識者の会議でございますが、令和2年6月の報告書では、2040年頃から逆算して顕在化する諸課題の対応という視点が示されておりまして、中長期的な未来像を見据えて対応策が検討なされているところでございます。

次に参ります。また、地域コミュニティに特化した国の報告書としまして、総務省から令和4年度にお示しがあったものがございます。この報告書の中では、今後の活動の視点として下の方に示しております「地域活動ものデジタル化」「自治会等の活動の持続可能性の向上」、それから「地域コミュニティの様々な主体間の連携」と、こういった3つの視点が示されているところです。

こうした国の考え方も踏まえながら、地域コミュニティの未来像と進むべき方向性を示す骨太の方針として、「北九州市地域コミュニティビジョン」の策定を行いたいと考えております。現在のコンセプトとして、資料に記載もございますが、「多様な主体による全世代参加型地域コミュニティ」としてありますが、これをグランドデザインとしながら検討会での議論をスタートさせていただければと思っております。また、会議のご議論に加えまして、いろいろな形で市民の皆様の声を幅広く伺っていく機会を設けたいと思っております。

今回取り組む議論につきましては、もちろん北九州市についてのものということで作ってまいりますけれども、その成果は全国的なモデルとなり得る可能性を秘めていると考えております。理由はお示ししている二点ございまして、一つは、北九州市には公害の克服や安全なまちづくりに向けて取り組んだ住民自治の土台があるということ。二点目に、自然と都会のバランスがよく、また、道路や鉄道など交通インフラが整備されていて日本の中の人口的にもだいたい100分の1ということと考えますと、日本の標準的な、いわば100分の1の都市モデルというのをお示しができるのではないかと。その中で、お示しをするビジョンというのは一定の汎用性を持つのではないかと考えております。

これを踏まえまして、今回の検討会議を第一回目として開催をさせていただいております。今後新たな地域コミュニティの在り方について、活発なご議論をいただければと考えているところでございます。

なお、議論の前提としまして、このビジョンの策定に向けまして、私どもが重要ではないかと捉えている考え方を、今回仮説ということで三点、皆様にお示しをさせていただきたいと考えております。この仮説につきましては、あくまで私どもの仮説でございまして、この後皆様のご視点から自由にご意見を頂戴できればと考えております。

まず一点目としまして、様々な課題への対応にはフォアキャスト型の思考、いわゆる現状の課題の解決策から考えていくのではなく、バックキャスト型の思考、望ましい未来像を描いて、そこから逆算していく、考えていくべきではないかと考えております。少し補足させていただきますと、ビジョンが骨太の方針と位置付けをさせていただきました。まちの基盤となるサステナブルの地域コミュニティの在り方を見出すことを目的としております。その骨太の方針を見出す上で、個々の課

題やその解決策の積み上げから少し距離を取って、まずあるべき未来像を皆様とともに描かせていただくと。そこから、お示しをしています。バックキャスティング型の思考で、その未来像に至るための道、対応策を考えていくのが、中長期的に見まして、全体の整合性を取りながら。状態を改善に導いていくには最善の方法ではないかと考えております。

二点目の仮説としまして、将来像を描く上では以下の三つの視点が重要ではないかと考えています。「現状からのイノベーション」「関係者の垣根を超えて接続」「好循環を生み出す」の三点となります。一点ごとにご説明させていただきます。

一点目は「現状からのイノベーション」と記載しております。これはもちろん、皆様のご尽力によって現在でもうまく地域活動が進んでいるものまでも、全て一律で変えてしまうということではございません。現在、なかなか難しい課題を抱えている地域がございますので、それを全て過去の良かった頃に戻すというのは時代の流れとしてなかなか難しいところがございます。その中で、どう現状から必要に応じて変化、進歩しながら持続可能性、サステナビリティというのを取り戻していくのかとかという、イノベーションの視点が大事ではないかと考えているのが一点目でございます。

また、二点目でございます。今、地域活動の担い手の不足というのが言われている中でございますけれども、関係者、ステークホルダーという言葉も使わせていただいておりますが、その関係者の方々の垣根を超えて接続、協働していくということがこれから大事になるのではないかと考えております。既に、地域に関係してくださっております皆様の前提はもちろんのこと、新たな主体を含めた接続、あるいは官民の接続という文脈での検討も必要になってくるかもしれないと考えております。

また、三点目でございますが、これらを踏まえて好循環を生んでいくこと、良い方向に向かって自ら走っていくような良い循環を生んでいくこと、こうした観点が三点必要ではないかと考えてございます。

最後に三つ目の仮説としまして、市民マインドを踏まえた議論が重要ではないかとお示しをさせていただきました。今回私どもが取り組むのは地域コミュニティビジョンでございまして、通常の事業としましては、このビジョンの考え方に基づいて、個別の事業に取り組むのが一般的でございます。ただ、このビジョンに基づく事業や取り組みを実効性のあるものにしていくためには、ビジョンの基盤にあります市民の皆様のマインド、市民性とか気質といったものも踏まえて行う必要があると考えてございます。北九州市は五市の合併を経て成立したという経緯でございまして、モノづくりのまちとして発展してきたという歴史等がございます。これまでも北九州市の市民の方々に共通した個性や市民性というものが、他の計画でも指摘をされているところです。例えば、北九州市の新ビジョンの中でも「人情」ですとか、「多様性を受け入れる包摂性」といったものに触れられており、あるいは公共マネジメントの関係の計画では公共施設の整備の背景として、「旧五市の均衡」といったものにも触れられております。地域コミュニティの活動や事業の在り方というの、それが生活と深く結びついたものであるからこそ、こうした市民性やマインドの部分についても、皆様と共有させていただきながら、場合によっては議論の対象としながら検討を進めていく必要があるのではないかと考えているところでございます。事務局からの説明は、駆け足となつてまいまして申し訳ありませんが、以上でございます。

松永構成員(座長)

ありがとうございました。それでは、ゲストスピーカーの講話ということで、酒本さんにお話いただければと思います。その後、ディスカッションにしたいと思います。では早速ですが、よろしくお願いします。

酒本氏

札幌からきた株式会社KITABAの酒本と申します。よろしくお願いします。

去年お呼びいただいて、お話をさせていただいたりしております。かれこれ10数年コミュニティの課題に取り組んでおります。11年前か12年前だと思いますけれども、弊社にシドニー大学の先生がいらっしゃって、自分のところは何か町内会とかの活性化の仕事をしているんだってねっていう、偶然そういう話をどこかでお聞きになって、お見えになりました。それで、実はそのシドニー大学の先生は地域コミュニティの研究をされていたと。それで、「なんで地域コミュニティ、そして町内会のこと気になるんですか」というと、世界の地域コミュニティマネジメントを調べていくと、日本の町内会・自治会って結構優れているって言うんです。ちょうどオーストラリアはその当時、都市犯罪が非常に増えて、コミュニティでなんかしなきゃいけないといったところから、シドニー大学の先生が地域コミュニティを研究されて、たまたま弊社が町内会の活性化をやっていたので、そんな話をして、会社として地域コミュニティを頑張ろうっていうのが今に至っているという状況でございます。

去年、北九州市さんにお声かけいただいたほか、弊社は全国で地域コミュニティの活性化をさせていただいております。人口2,000人の北海道の小さな村のコミュニティ再生から札幌市・大阪市さんとか、横浜市さんとか、北九州市さんという大きな都市、こういったところも地域コミュニティに関わらせていただいていると。私は、個人的には多分1,200とか1,300に近い町内会の皆さんとお話をしてきたんじゃないかということで、今日はこれからの地域コミュニティについて話したいと思います。

それで私が最初にお話ししたいのは、今高齢化社会と言われていますが、実は地域コミュニティで暮らす人口というのがもう半分近くになっていると。これは高齢者だけではなくて、地域コミュニティを必要とするのは、主に皆さんご存知だと思いますけど、お子さんと高齢者、それからここには出てこない子育て世代。この3つの世代がやっぱり地域コミュニティに非常に大事だと感じてらっしゃるのではないかと。北九州市さんの場合、令和2年の国勢調査ですけど、地域コミュニティが暮らしの中心になっている15歳未満と65歳以上の方を合わせると44%。この方々は地域コミュニティが暮らしの中心だということで、いかにコミュニティが大事かというのが、この数字で分かるんじゃないかなと思います。我々がお付き合いしている街の中でも、もう54%とかですね、そういった数字のところもございます。それから、今いろんなまちで取り組んでいるウォークアブル、歩いて楽しいというような、こういった事業もやはりこの辺にしているんじゃないかなと。他都市のこういったところではないかなと考えております。そして、これは小さな町のお話ですけど、例えば子育てに優しいまちを作りたいねっていう話をした時に、行政さんがされるのは、例えば保育料の無償化だったり、小学校の入学金とか出産だったり、そういったご支援をされます。ただし、本当に

子育てしやすい町っていうのは、やっぱり地域コミュニティの中の子育てサロンが開催されてほしいとか、クリスマス会とかハロウィンの子供イベントがあるといいよねとか、こういったニーズ。それから、地域のコミュニティの大人が子どもの見守りをそっとするといった、地域コミュニティがいかに充実しているかで、子育てしやすいまちっていうのは最後決まるんじゃないかなと思います。弊社はですね、都市計画とかいろいろやっていますが、地域コミュニティは繋がり社会インフラだと、今スタッフとともに話をしているというところなんです。こういった繋がりをいかに作れるかというのが、地域コミュニティの大事な役割ではないかと感じております。例えば、もうちょっと古い話ですけど、十数年前にある札幌市内の地域で、地域の憲章、例えば札幌市だと市民憲章とかあるんですけど、そういった地域憲章を作ろうということで、小学校五年生に学校の協力をいただいて、地域のお宝を探してきてくださいというのをワークショップでやりました。その当時は使い捨てカメラがまだあったので、使い捨てカメラをグループにお渡しして地域のお宝を探してきてくださいって、お子さんに2週間の時間で撮ってきてくれました。我々が想定したのは、普段遊んでいる公園とか校庭である大きな木とか、そういったものを撮ってくるんだろうな、それから近くに小川があるので、そういったところだと予想していたんですが、お子さんたちが撮ってきたのは地域コミュニティの中にいる人ばかり。人がすごく多いです。例えば一番分かりやすいのは、朝に通学路で旗を振ってくれているおじさんや女性の方っていうのと、全然分からない、「この人誰」って聞いたら、「実はこのおじさんは自転車のパンクをタダで直してくれて、僕たちには大事なお宝だ」っていう。お子さんは別に地域コミュニティを意識しているわけじゃないんですけど。自分たちはやっぱり地域コミュニティの中で育てられているんじゃないかっていうのを非常に感じているんだなっていうのを思った仕事がありました。

なので、やはり最後は地域コミュニティが効いてくると思いますし、北九州さんはそうじゃないかもしれませんが、我々がお付き合いしている北海道の小さな町では、最後、札幌とか東京とか都会に出て、じゃあもう戻りたいなって思うのは、やっぱり地域コミュニティに知っている人がいるかないかっていうのは結構大きな問題なので。地域コミュニティっていうのはまちづくりに本当に貴重なインフラではないかなと私は思っております。

そして今、地域コミュニティに何が起きているかというと、先ほどお話がありましたけども、どんどん課題が増えていると。高齢化はもちろんですけど、北九州市さんはないかもしれないですけど空き家とかですね、ヤングケアラーの問題、それから先ほど出ました孤独とか、それから外国人の問題、いろんな課題が出ています。札幌市の総合計画、一番上位の計画の時のワークショップで出されたご意見、1,000枚とか2,000枚とかあったと思いますけど、それをAIで分析すると、「町内会」、「コミュニティ」といろいろ出てくるんですけど、「若者」、「孤独」「コミュニティの場」とかっていうのが結構繋がりで出てきます。こういった形で、地域コミュニティの課題って本当に見えないので分かりづらいんですけど、今すごく増えているのではないかなと思います。そういった分からない、見えない課題に対して、我々はインタビューをしておりますが、例えば育児中の方に聞くと、少し前までは働いていたんだけど育児で社会との繋がりがなくなってしまって非常に寂しい、不安だと。なので、地域コミュニティの中でベテランお母さんと話ができれば最高ですね、という思いは本当に切実に聞いております。それから子育て世代の方々は、当然子ども向けイベントとかクリスマス会、それから場合によっては地域食堂、子ども食堂があるといいなって

というような、そういったご意見があります。そして、あまりこれまで議論されなかった若い世代の方も、今言いましたように孤独を非常に感じていると。適切、適度な人の繋がり、「いや、スマートフォンで繋がっているからいいでしょう」と聞きますけれど、そんなことはないんです。直接人と繋がりたい、コミュニティカフェみたいにサード・プレイスみたいなところがあると非常にいいと思います、というのが若い世代からも聞かれる声でございます。そして、もっと忘れられている中学生・高校生。ここもやはり友達とお喋りできる場所が欲しい、家の近くで気分を変えて勉強できる場所があるといいんだ、ということを中学生・高校生。やはりコミュニティの中で、彼らも居場所を探しているということが言えるんじゃないかと。我々、札幌市さんと町内会館の利活用ということを検討しています。その中で、どうしても自治会・町内会で管理しているので17時に閉めちゃうとかあるんですけど、それを夜21時まで開けます。管理はその時だけ弊社でやっていましたけれど、管理って言ってもデジタルなので使いたい人はLINEで登録してください、そして使いたい人はLINEで申し込んでくださいとします。そうすると、電子ロックの番号だけ教えます。あとルールは全部決めているので、そうすると1ヶ月間のモデル事業の中で一番使っていたのが中学生と高校生です。夜21時まで勉強しています。たまにチェックすると、中学生・高校生が勉強しているのでアンケートを取ると、「こういうのを是非やってほしい」、「私たちはこういう場所を探していました」というお声がありました。これに、今コミュニティがしっかり応えているかっていうこともあるんじゃないかなと思っています。高齢者の方は健康イベントとかカラオケ大会やりたいというようなお話、それから日帰り旅行もやってほしいなっていうご要望があると思います。これを町内会とか自治会ごとに、世代ごとにアンケートを取るとかなりのニーズの違いが出てきます。日帰り旅行みたいのは70代、80代が断トツで多いんですけど、30代、40代は全くないに近いです。こういった世代によって違うということをこれからは認識して、全世代で地域コミュニティを作らなきゃいけない。運営していかなきゃいけないっていうことであれば、ニーズをしっかり世代ごとに把握しながら運営していく必要があると思っています。

そして外国人の方も増えているのではないかと。これは外国人の方に聞きましたけど、自治会とか町内会を知らないから、「ゴミ出しのルールを教えてくださいいいのに」、「地域の方ともっと交流したい」ということで、あるレストランでそれぞれの国の食材を持ち寄って、町内会の方と交流したらすごく盛り上がり、その時に片言で一生懸命、自治会のルールを役員の方が教えていただいて。これで私たち分かったと。そういった交流をしていただいたらいいんじゃないかなと思います。こういった課題が、それから世代によって多様なニーズが生まれている中で、先ほどお話がありましたように、これは北九州市さんだけではなくて、全国の自治会・町内会の共通した課題が加入率の低下、上がっているところは残念ながら我々がお邪魔している自治体の中ではございません。全部下がっています。一番高いところで、我々が知っている中で盛岡市さんと仙台市さんが、もしかしたら東日本の影響で自治会加入率が高いのかなと勝手に思っておりますが、こういったところが七十数%をキープしております。ただ、一部の都市ではもう50%を切っているところが出始めていますので、加入率の低下が大きな課題になっています。そして同時に担い手不足、高齢化で担い手がいないという状況に、今どこの自治会・町内会さんも同じじゃないかなと。そして最近いろんな町内会・自治会にお邪魔した時に出てくるのが、やはり何か変わらなきゃいけないんだけど、どうしたらいいか分からないっていうのが一つと、決められないということがあるんじ

やないかなと。町内会の役員の方も、場合によってはくじ引きで役員になったって方もいらっしゃる、そこまでなかなか責任取れないよっていう、そういったこともあって、なかなか変わらない、変わることができないといった自治会・町内会独自の運営の課題もあるのではないかと考えております。こういった中で、これからのコミュニティを考えるとということで、本当はいい案を考えて今日ご提案できればいいんですけど、それはまたの機会にします。それが今、どんなことが起きているのかなということで、例えば、これは札幌とか函館で起きているんですけど、バスの運転手さんがいなくなって、それでバス路線が維持できなくなる。通学とか通院のためのバスを確保するのに、自治会・町内会が路線バスはできないので観光バスの事業者さんと協力をして、バス運行を始めております。これは札幌市の厚別区という割と大きな自治会さんです。こういったところもバスが減便になったり廃止になったりしているのをお願いしているというような。今までにはない課題が出てきている。要は、自治会・町内会が地域のマネジメントをこれからはしていかなきゃいけないってというのが、これを見た時に非常に感じております。そしてこれが先ほど申しました、自治会館・町内会館。こういったコワーキングスペースの実験をさせていただいたところ、我々もあんまり予想はしていませんでしたけど、中学生・高校生が圧倒的に多かった。我々も忘れていたわけではないんですけど、コワーキングスペースは日曜日に大人の方が利用するんだろうと思ったんですけど、中学生・高校生が非常に多かったというのがあります。それから、私がお邪魔している横浜市の都筑区さんで、UR団地で立派で綺麗な集会施設がございまして。でも加入率は50%くらいです。なので、ダメ元でこの会館を使ってカフェみたいにやってみましょうよと。30人来れば大成功って言ったら、100人の方がいらっしゃる。その時に話したのが、「もう自治会に入ると言うのは辞めましょう」と。「カフェの会員になって」と言う。カフェの会員だったらきっと入ってくれる人がいるんじゃないっていうようなことは事前に話をして、来た方に、このカフェどこがやっているんですかっていう方が、自治会ですって言ったら、じゃあ自治会に入りますと言い方もいらっしゃるということで、もっともっとコミュニティのスペースうまく使っていくところが大事になるんじゃないかなと思います。

これは去年もお話させていただいたかもしれませんが、札幌市内の小さい町内会ですけど、町内会館をお持ちなので、そこで居酒屋をやって、それでスタート時は数十人、今は160人の方が豪気をして、年に6回第3土曜日になると、「今日は旭水会館で居酒屋やります」という宣伝カーが一応走るらしいんですけど、そういったことで集客をしながらというので段々人が増えて、今は大学生もしっかり運営を手伝ってくれている。そしてこの集まりがですね、聞いたのが、皆さん記憶にないかもしれないですけど、北海道全域が停電になったブラックアウトということがございました。この時に、この会館の周りのマンション、それから賃貸住宅が全部、当然水道が止まってしまうわけですね。それでトイレが使えなくなりました、水汲めませんというので、皆さんこの居酒屋をやっていたので、そうだと、会館に行こうとなります。そしてマンションの方もこの会館でしばらくおしゃべりをしたり、水を汲んだりトイレ使ったりということで、会長さんが「本当に普段こういうことやっていてよかった」、「災害時に本当に助かったよって皆さんに言われた」っておっしゃっていました。こういったコミュニティの場が非常に大事になるんだなと思って。

それから同じですけど、会館を少しリニューアルしてカフェスペースを作って、そこで地域食堂をやっているというところがございます。これは我々もお手伝いしていたので、もうボロボロの農

業倉庫みたいな会館だったんですけど、それを一部を少し綺麗にして、そしたらやっぱり皆さんがお集まりになったり、NPOさんが使わせてくださいということでマッチングさせていただいて、今は地域食堂なんかに使っていただいております。

後は最近、森岡市さんから聞いたお話なので、あまり詳しくはないんですけど、地域の住民の方が自分たちでカフェを立ち上げて、地域住民の方で運営されているというカフェができていますとお聞きしております。

こうやってみると、やっぱりこれからのコミュニティには、カフェみたいなサード・プレイスと言いますか、コミュニティの拠点が非常に大事なんじゃないかなと。そこで顔を合わせて何かアイデアを出していくというようなことは、すごく大事だと思います。

また、これは岩手県の花巻市さんに取材に行かせていただいた時に、これは三人一組で毎日ワンドイシェフということで、交代制でレストランをやっているとおっしゃって、これは元々空き家でやっていたのが、高齢者施設ができた時に1階に入っていましたけども、そういったところから始まっていきました。こういったコミュニティが非常に大事なかなと思います。

それから札幌の郊外は、もう空き施設が出始めていて。閉じてしまった幼稚園を複数の町内会がお金を出しあって、安く払い下げを受けてイノベーションして、こういう交流施設として利益を生んでいます。百数十万円だそうです。まあ、そこから返している部分もあると思いますが。こういった複数の地域コミュニティが、こういった場を作っています。

これは非常に小さな集落です。Aコープさんっていうお店がなくなっちゃったので、さあどうしようということで、地域住民の方とNPOを作ってお店にしようかっていうことで、お店を核にして。これお店入っているんですけど、コミュニティスペースの中でいろんなイベントをやったり、郊外でちょっとでもイベントをやったり。地域コミュニティの核になっています。

あとは、これを商店街に展開した事例でございますが、空き店舗を活用したこういったコミュニティの場を、我々も一緒に運営させていただいています。かなり大きな空き店舗でございました。それをまちづくり会社が安く買い上げて中を改装して、そしてコワーキングスペースと、それから町内会の方も使える会議室、こういったものを作ってイベントなんかもやって、商店街に賑わいをもたらしていると。

更に、例えば公共空間を企業が運営するということで、例えばキッチンカーを出したり、維持管理を民間がやるということがエリアマネジメントということで始まっていますし、これは北見市さんっていう北海道のまちの小さな広場ですけど、ここを我々も出資しながら会社を作っていくということを今計画してございます。

こういった人の繋がりがっているのは日本だけではなく、さっきシドニーの話もしましたが、ここに見ていただくようにデンマークのコペンハーゲン、2018年頃からたくさんの方が集まって、日本でいう地域食堂ですよ、イベントが非常に盛んに行われていると。最初のスタートは、若い方が孤独だ、皆でご飯食べようから始まっていると聞きました。そして寄付で集まったお金で食材を買ったりというようなことが非常に盛んに行われている。こういうことは、日本でも同じようなことが、世界で起きているんだなと感じております。こういったところに何かヒントがあるだろう。それから海外を見ると、コミュニティで空き家や土地を管理運営しているというのがあります。イギリスやアメリカなんかは、土地をコミュニティで管理する。そしてうまく利用している事例がたくさん出てき

ますので。こういったことを考えると、北九州さんにこれが出てくるかは分からないですけど、北海道は結構でかいのでこういった話をさせていただくんですけど。そしてそれをコミュニティの場としてうまく使っていくんだというのは、これからもっともっと考えてよいのではないかなと思っています。

そうすると、今後のコミュニティに求められるというのは、今まで自治会・町内気がやっていた暮らしを支える機能、これはもう必須かと思いますが、それから、もう一つは多様主体で地域課題をしっかりと解決していく。そして孤独を感じているとか、人を繋ぐということが非常に大事だと思うので、そういったコミュニティの場の運営みたいなところ、そしてそれらをしっかりとマネジメント、コーディネートしていくというのが今後の地域コミュニティに求められるのではないかなと思います。暮らしを支えるっていうことは無くならないと思いますし、先ほど事務局のご説明にありました、多世代、多様なということを考えると、そのネットワークをうまくコーディネートする、そして人を繋ぐということをコーディネートする、こういったコーディネートと課題解決のマネジメントが非常に大事ではないかと思っています。

こういったイメージですが、この真ん中をどこが担うかっていうのが、これからの大きな課題なのかな。例えば左上は、部活動も地域に落ちてくるとかですね。先ほど言いました右側のつながりの場みたいところ。そして、緑は先ほど申しました地域交通、子育て。こういったものをしっかりとコーディネートしていく中立する立場が求められると思うんですけども、ここをどういったところが担っていくのかっていうのが一つ検討していかないといけないのではないかなと考えております。

北九州市さんには自治会・町内会があって、今聞いたところによると205の校区自治会ある。それから自治会・町内会は2,784となっております。こういったところが担うのか、それともまちづくり協議会が、今言った地域コミュニティのマネジメントを担っていくのかというようなことを、今後考えていかなければいけないのかな。ただ、私は三つのタイプが出てくるんじゃないかと勝手に想像しております。一つは、自治会・町内会がマネジメント力をつけてですね、自らの地域コミュニティを運営していくタイプ。もしかしたら、これは発展的に共同組合的になっていくのかな。例えば、通帳を欲しいとかですね。こういった課題が結構出てくるので、法人化が多分これから必須になるんじゃないかなっていう勝手に予想すると、共同組合みたいのもあるのかと思いますし、まちづくり協議会発展型と書かせていただいています。これは多様なネットワークを基にするのであれば、一般社団法人みたいな組織体になって、そこにいろんな団体が連携した形。それを一般社会法人がしっかりとコーディネート、マネジメントしていくというタイプが出てくるかなと思います。そして、株式会社とか一般社団法人、NPOと書いています一番下のところです。これは例えば、地域内外の有志が、じゃあカフェをやろうよ、空き家を使ってカフェをやしましょう、そしてそこを拠点に地域の方とどんどん繋がって、結局は地域マネジメントをしていきたいと思いますというタイプで、割と急に出てくるかなと思います。こういったタイプもこれから出るかな。特にサード・プレイス、コミュニティの場づくりということが重要視されるようになれば、株式会社・一般社団の三つ目のところが出てくる可能性が非常に近いのではないかと思います。

先日、NHKのテレビでも東京の銭湯を中心にした街づくりっていうのをやっていましたけど、そこは会員制のカフェですよ。銭湯は会員制じゃなくて。アパートがあって、そこはお風呂がついてなくて、そこに住んだ方は銭湯を使う。銭湯の横にカフェがある。カフェは会員制ですよ。そこ

で餅つきをやったり、皆でそのカフェに集まって地域の清掃活動をしったりっていう、まさしく自治会・町内会の活動をしているのが、NHKでやっておりましたけれど、そういった形で三つ目のタイプが出てくるんじゃないかなと思います。

こういった形で地域コミュニティに課題がいっぱい。それから、自治体・町内会を少し見直していかないといけない。その時に、地域コミュニティマネジメントというものを考えていく必要があるかなと思います。

話題提供については以上です、ありがとうございました。

松永構成員(座長)

はい、ありがとうございました。非常に盛りだくさんで、あと2倍くらい時間が欲しかったところです。では、さっき少し先走ってしまいましたが、最初に事務局からご説明いただいた資料4ですね。

地域のいろんな事情ですとか、来像のところとこの検討会でやるべきことから、仮説を三つ挙げていただきましたので、の辺ですね。それから、今の酒本さんからの講話、いろんな事例を含めて、あるいは一番最後にこれからコミュニティをどうやって担っていくんだという、この辺も含めて皆さんから質問でもいいですし、ご意見でも結構ですが、出していいただければというふうに思います。

それで、前回準備会のようなものをやりましたけど、あの時お二人ぐらいご欠席があったんですが、あの時にわいがやでやりましょうみたいな話をしたので、もうざっくばらんに喋りたい人から喋っていただければというふうに思いますので。ただ一応公式にはなりたいたいの、ちょっと発言する時に一言だけ自己紹介を入れていただいて、ご意見ご質問いただければ、助かるかなというふうに思います。はい、じゃ、どなたからでもどこからでも結構ですが、いかがでしょうか。感想も含めてですね。では大熊さんから。

大熊構成員

ありがとうございます。はい、福岡県のうきは市から来ております。うきはの宝株式会社の代表の大熊と申します。

非常に、私たちは全然専門的にまちづくりとかコミュニティやってないんですけど、私はやっぱり当然どこかの市の市民で、事業をやって地域に入り込んでやっていますので、ちょっと意識はしてなかったんですが、ばあちゃん喫茶というのを福岡県内で結構展開しております、それはもう本当事例に挙げられてたように、地域のおばあちゃん達が週替わりで店長をやって、うちの場合、観光客がお客さんに来るんじゃなくて、地域の人達が集って、そこで子供から店長のおばあちゃん達から、そのコミュニティが狙いだったわけじゃないんですけども、そういうのが自然とできちゃってるっていうような形ですね。非常にこの図が、自分の中でもお聞きして24ページですね。いろいろとなんか考えが巡り巡ったなど。僕もちろん専門じゃないんですけども、個人的な、思想というか、なぜこのコミュニティがこういうふうになってきたのかって、非常に失礼な言い方するんですけども、要は組織って魅力がなくなったり、必要性がなくなったり、あれしてから衰退してってるっていうだけの話だと思うんです。最後冒頭にあった時、いいところ残すとはおっしゃったんですけども、僕はもう抜本的な改革が必要だと思っていて、もう戦術やったところで多分変わらない。もう概念ごと変える必要があると思って、この中立的コーディネートも非常に分かるんで

すけれども、ここって相当至難の技ですよ。

酒本氏

はい。

大熊構成員

はい。僕はやっぱり主体を若い人にすべきじゃないかなと。さらに感じました。というのがやっぱり先輩方の知見とか、もともとコミュニティ運営やってきたのって、すごく重要だと思うんだけど、これからコミュニティを作っていく人たちは誰なんですかっていうところなんですね。

そこが多分、今、北九州市だけじゃないですよ。どこでも先輩方が議論ばかりしてて、若いこれからコミュニティに入る人とか、そこに期待している人たちが抜け落ちてんですよ。ここを僕はトップにすべきだと思う。で、ある程度決裁権とかもろもろ渡してあげて、中立的コーディネーターをやったりすごく押し上げてあげるような形。

報酬に関しても。そうすると責任持って若い人が高齢者に相談したりしながら引っ張っていくんじゃないかなと。この人たちの世代が多分作っていく。と個人的には思いました。すみません。個人の感想です。

日高構成員

はい、よろしいですか。

松永構成員(座長)

はい。どうぞ。

日高構成員

はい、簡単に自己紹介させていただきます。

西小倉校区まちづくり協議会の会長をしております。私はボランティアというか、子ども会から始まって子供の小中高とPTAをいたしまして、平成7年度、8年度は北九州市PTA協議会という、市内のPTA組織をまとめた会の会長を2年間いたしました。その後、地域活動に誘われてということで、町内会長を24年しまして、昨年次の方に交代いたしました。それからまちづくり協議会が今2年経って13年目に入っております。それから自治連合会も昨年の春まで4期8年会長をいたしまして、あと社会福祉協議会の会長もいたしております。今、大熊さんのご意見に私は同感の部分と、もっと現状の今の地域コミュニティというものを考えた時に、気持ちは分かるけどちょっと暴論かなと。

ただ、私は大熊さんと気持ちは同じかなというのが、今回のこの会議が2040年ということで考えた時に、多分15年後に私はこの世にいないと思いますし、それから今の子育て世代がちょうど地域デビューっていうか、地域に入ってくる頃になるんじゃないかなと。そう思ったら、私はやっぱり子育て世代が今地域というものに対して、どのように思っているとか、今後どうなってほしいとか、そのへんを掴んだ上で議論していくことが大事なんじゃないかなというふうに思います。

私どもでは西村先生に、今日いらっしゃる、ご指導いただいて、平成 26 年度に校区内でアンケートをいたしました。皆さんはどのようなことを望まれているかということで、町内会に入っている方だけだと意見も偏るので、町内会に入っていない世代ということで、小学校も通じて、約五百数十人のアンケートとらせていただいて、その中で三つの柱というのが見えてきた。それで、その三つの柱にどう近づけるかということのをこれまでやってまいりました。そういった意味では私はこの会議の議論にぜひ子育て世代の方の意識調査っていうか、それをぜひ取り入れながら、次回以降の会議に望んでいったらどうなのかなと。そういった意味ではアンケート取る分にはうちの校区もご協力しますし、それからまた子育て世代っていう意味では PTA の組織も活用して、今いろいろ学校のテトルに似たようないろんなものもあるようですので、幅広く意見も集められるんじゃないかなと。その辺も集めながら今後議論していったらどうかということで、気持ちとしては大熊さんと一緒です。以上でございます。

松永構成員(座長)

反対なところはどこですか。

日高構成員

反対なところは、今地道に地域でやっている活動、福祉活動含めて。その辺はもうちょっと大熊さんにも知ってほしいなというふうに思います。

大熊構成員

全体の状態から言った、部分的に最適なのはもちろんありますので。暴論すぎました。

松永構成員(座長)

ここは皆さんに自由に発言していただく場なので。ありがとうございます。じゃあ、どうぞ。

太田構成員

はい、私は今婦人会をやっています太田康子と申します。前回出席できませんでしたので、今回発言させていただきます。地域において自治会に流れてくるものも、女性の方に流れてくるのがとても少ないっていうことを感じましたので、これは婦人会を作ると同じように下りてくる。すると理解をしながらお互いが協力できること、このように早く知って動けるようにと、婦人会を作りたいと自治会長に申し出て、これからは男女一緒だからねっていうふうに理解のある方でした。

即回覧を回していただいて、65名で婦人会を作って30年が経ちます。

年齢は50代から始まって、今80代前後の方が多くなり、もう歳なのと言う方が出てきました。年齢を言わない。年齢を言うと、みんな私もそうだって言うから、歳を言わないで、楽しいことをやって、いつまでも健康でやっていることが見えて、「あ、いいね、入ろうか」って言えるような活動をしていきたいと思います。私もPTA活動を永年して、そこから公民館勤務をして館長もさせていただき、いかに地域の人を集めるか、それにはどうしたらいいかっていうことを悩みながら生涯学習っていうことで頑張ってきました。自分も75歳になった時に、地域に大学があり、

地域創造学科もできたので、中に入って学んでみたいなどと思い、75歳で入学して、今年の3月19日に無事に卒業させていただきました。

松永構成員(座長)

おめでとうございます。

太田構成員

ありがとうございます。お友達は孫の世代なんですが、対等に話ができて、一緒にグループ活動をしたり、こういう時には自分の気持ちを言わないと伝わらないんだから、私は言ってるよ。「大学にいきたい」「じゃあ、おいで」と言われ、これで意思が通じ合い今大学に通っているよって言います。

そしてやっぱり先程にも出ましたように、若者が今後どのような世界を夢見ているか、なってほしいのかっていうのを聴くということで、私たちはそれに向かっていろんな体験をしてきたわけですから援助っていうか、下支えが出来るところで頑張っていきたいなっていうふうに思っております。婦人会を立ち上げた時には福祉協力員になって、自分たちが歳をとった時に「助けて」と言いやすい仲間になろう。今役に立つことをやっていこうよと言って、ふれあい昼食会を始めたりとか、地域活動に頑張ってきております。これからも楽しいことを中心に、皆さんがやりたいねと言えるような活動にしていきたいと思っております。今のところそれまでです。

松永構成員(座長)

はい、ありがとうございます。太田さんが大学卒業したのを、ニュースかなんかで見ました。あ、太田さんだと思った。

太田さん、今の意見でその若者が将来どうしたいんだとか、それを引っ張り出したいっていう。大学で一緒に若者とやってて、コミュニティとか、婦人会とか自治会とか、その辺なんかどんな感じですか。

太田構成員

婦人会についてお話をしてくださいと先生に言われましたので、映像とともに、こういうことをやっていますと、1年間の行事を見せたんですね。すると、「あ、それは僕たちにもできる内容だ。参加していいんですか」って言う。「でもどういうふうにやってらっしゃるのかとか見えないので、参加のしようがない」というふうな意見をいただいたので、しかも私たちは男性も歓迎よって言ったら、「じゃ婦人会というちょっと名前が気になるな」という意見とかもいただいたんですけど、そういうふうに知っていただく、チャンスをいただいたのはよかったなと思います。

構成員(座長)

やっぱり情報があんまり行ってないっていうところと、その、「婦人会」って名前や、見せ方というか、イメージというか。だからその辺は課題があるかもしれないということですね。

太田構成員

やっぱり知っていただくってことで見える化をしないと、若い人もやりたくても入りたくても分からない。そういうことかなと思います。

松永構成員(座長)

ありがとうございます。はい、どなたでもいいです。早いもの勝ちですよ。中村さん。

中村構成員

はい、元市民センターの館長です。市民センターは何やっているかわかんないって言われると思いますので、私がやってきたことをさっさとだけお話しします。最初は南区の葛原というところに配属されまして、伝統芸能の葛原新町楽の腰蓑を25年ぶりに作り直すって言われて、インターネットで藍色の顔料を探しましてね、地域の方と一緒にふやかした木をこう編むとかいうのをやりました。あとですね、地域の祭りの時に業者さんが一括で入ると、いわゆるなんとかさんになるかな。できたらこうみんなが参加する形がいいよねってことで、場所代1000円だけ払ったらテントとか机とか電気とか全部提供しますよって、地域の団体、個人、お店が自由に参加できる形に地域の皆さんと2年くらいかけて改革しました。守恒に参りました時は北九州市立大の留学生の皆さんが地域にたくさん住んでいて、学校の方からですね、30軒ぐらい泊まれなくていいから、お茶を飲む場所を作ってほしいと言われて、一生懸命探しました。同時に、食べ物を通じた国際交流ができるといいのかな、10代だったり、20代の前半だったりの学生さんなので、その国を代表するお食事って言った時に、有名ないけど、私食べたことない、中国の餃子は私初めて食べましたとか言いながら、一緒に作ったりとか、逆に日本の食事紹介したりなんてことをやりました。あと、守恒の市民センターの裏に、遊休地がありまして、そこをガーデン化したいっていう地域の想いがあったんだけど、なかなか表から見えないとこなので、予算取りが難しいっていうことで、総括補助金を活用する方法とかを考えて、立派なイギリス式のガーデンが今あります。

あと認知症の行方不明の方を想定した見守りと可能な範囲での搜索活動ということで、地域主催で一番最初にやりました。南区に足掛け10年いて、その後に東区に移りました時にですね、結構今まで講座自信持ってやっていたんだけど、思ったほど人が来ないのですよ。なんだろうと思ったら、高齢化しててっていうのがすごくありまして、唯一人を集めていたのは老人会の会合なのですよね。会長さんに聞きました、秘訣は何？と言ったら「話は一時間、弁当をつける」って言われたんです。じゃあどうやったらできるかな？とりあえず、参加費50円いただいてそれから米一合持ってきてもらって、一汁一菜だけどなんかつけますという講座を始めました。そこで講座は、講師の方は90分拘束するので、一応そのお金は払うけど、お話は一時間で、後はみんなでお食事楽しんで、でもセルフサービスだから、お客さん作りませんよ。洗い場のところまで体が不自由じゃない人は運んでくださいとやっていました。

家庭菜園から野菜届けてくれる人とか、それから休日でもですね、道の駅に行ったら、この講座のことが気になってすぐ買い物しちゃう気のいい職員さんとかに支えられて、まあなんとかやってきたんですけど、「いい取り組みだね」って言って、5つの自治区会があるんだけど、一つの地域から協賛金をいただいたりとかですね、私の方は毎年50円ずつ400円くらいまで参加費を

アップして、少しずつ自己資金作って援助がなくても、自分たちで講師を呼べたらいいなとかいうのがあったんですけど、コロナでちょっとですね、ご飯作ってたのが今できなくなって。でも講座の方は残っているみたいです。

あと文化祭も自己資金で運営できたらいいなと思って、バザーとかの蓄えを大事にして運営していく方法を考えました。地域の皆さんには、クラブ活動している皆さんだけのお祭りじゃなくて、地域みんなのお祭りなんで、とにかく参加しましょうよっていう方向づけをしました。そして守恒の時に模擬訓練に関わった縁で、尾倉 2 年目の時に今の保健福祉局のお仕事に変わって 10 年になりますけど、今力を入れているのは小中学校に地域の方と一緒に出かけって認知症を学ぶという取り組みなんですね。若い世代も認知症学んでいるよということが分かれば、地域の人も元気になるのかなと。

あとですね、認知症の本人さん達がさかんに言われているんだけど、スマホは脳の代わりになるということで、ぜひ高齢の皆さんにスマホをしっかりと学んでいただいて、認知症になってもあまり不便感することなく生活できているということなんで、認知症になることを心配するよりも、上手にスマホ使えた方がいいのかなと思っています。あと、さっきの先生のお話伺っていて、今どうなっているか分かんないんですけど、10 年前の気持ちなんで違うかも分かんないけど、ムーブみたいに小・中学生、高校生がセンターにたくさん来たらいいなみたいなことは言っていました。町内会の運営にどこまでセンターが関わるのかとかいうのは、ずっと課題であるみたいなんですけど、もしルール整理して少し関わるのができるなら、私前回も話しましたが、「市民センター町内会」とかあればいいなとか思っている方なんで、「役所から来た人が関わるのが」とかいうことであれば、館長じゃなくて、職員の皆さんが関わるとかいうことでも、もしできるならいいのかななんて思いました。

今やっている仕事の延長線上なんですけど、認知症カフェっていうのが市内に 30 数箇所があります。運営者は介護事業所もありますし、個人宅でしているところとか、自治公民館とか市民センターとか色々あって、今図書館でもボチボチ、どういうふうにしていこうかなということで動きはじめていますので、うまく繋がれたら。知られてないんで、人が来ないのに耐られなくなってやめる人達もいるんですね。居場所というコンセプトであれば、どこの部局だからとか、もともとの目的がこれだったからとか限定しないで続けていく方法がひょっとしたら、あるのかななんて思いました。はい、ありがとうございます。

松永構成員(座長)

はい、ありがとうございます。僕は守恒に住んでいるんですけど、市民センターに庭があるのを知らなかった。すいません。

今の中村さんの元市民センターの館長としてのいろんな動きは、酒本さんの話に出た中立的コーディネーターという感じでしょうか。

酒本氏

そうですね。はい、もう中立的に動くというところでどう繋げるかが、多分市民センターさん、まだそこまで自由度がないのかな。

松永構成員(座長)

はいはい。市の職員ですもんね。

酒本氏

なので、そこはもしかしたら市民センターを核にしてというのは。

松永構成員(座長)

なるほど、ありがとうございます。はい、他いかがでしょう。古賀さん。

古賀えみ子構成員

私は一般社団法人北九州シニア応援団です。市民センターは今後、私達一般社団法人のような法人にも利用が可能となりました。私どもの団体も活用をさせていただき、地域のコミュニティに関わっていけるようになりました。是非活用させていただきたいと考えます。

北九州シニア応援団はご高齢者に特化したシニア情報誌さくらを 2013 年に創刊して 11 年になります。当誌のコンセプトは「シニアが元気なら町が元気になる」をコンセプトでシニアを応援する情報誌です。

自治会は若い方たちがどんどん参加し未来を担っていく事が理想ですが、多忙な若い方に変わって多くのシニアさんが携わっているのが現状です。

私は今回ご提案のプリントをお持ちしました。タイトルは「シルバーがゴールドに輝く北九州」の構想です。市長様は北九州にはあらゆるポテンシャルがあると云われます。

私はポテンシャルの一つとしてアクティブなシニアが多いことだと思います。

シニアの豊かな社会経験を自治会や町づくりに良好に生かしていただく為に北九州市からゴールドシニア認定をしてはいかがでしょうか？

ゴールドに輝くシニアが活躍する事で 若い方が未来に向け、町づくりへの前進的な影響力を与え、2040 年に向けて持続可能な新たな自治会活動にしていけるのではないのでしょうか。町づくりに熱心なゴールドに輝くシニアのプラットフォームは必要だと思います。

シニアが長年培った我が町のシニアポテンシャルはやがてはミドルシニアや Z 世代が地域コミュニティに興味を示し、活動に参画するようになるでしょう。ゴールドシニアは若者の手本となる人財を認定すると良いと思います。

「シルバーがゴールドに輝く町北九州」構想は A4 用紙 2 枚にご提案を明記していますので後ほどご覧ください。

さくら情報誌は楽しい情報や当誌企画を送っています。旅行やカラオケ、昭和の歌声、朗読会、等です。活動には北九州シニア応援団として企業、団体などもご協力頂いています。アクティブシニア同志のコミュニティは町を元気にします。

シニアがゴールドに輝くゴールドメダルやバッジをつけて誇りと責任感をもって活動できる様な組織を創っていければと思っています。以上です。

松永構成員(座長)

ありがとうございます。はい、いかがでしょうか？

西村構成員

ありがとうございます。はい、じゃ話していきます。

私、一般社団法人コミュニティシンクタンク北九州の西村と申します。主な活動としてはいろんな地域に入ってですね、地域課題を聞いてそれをどう解決するかっていうのをずっともう何十年間やっているんですけども、今日の説明お話を聞きまして、感じたのはバックキャスト型の思考ですね。そこについて、実際私が地域に入っていて、どれぐらいの地域がそういった未来像を描きながら活動しているのかっていうところが、今後必要なかなっていうのを改めて感じたんですね。

今のこのフォアキャスト型で考えている地域のが非常に多いんじゃないかなと思いますので、そこを例えばなんですけども、未来像を描きたい人、もうそれは町内会に入っようが入っまいが、こういうふうな地域をやってみたいんだっていう方々がそこに集って、そこでなんか議論できればであったりとか、じゃこういうふうにするときには、先ほど古賀さんが言われましたように、「企業さんの協力も必要だね」「NPOさんの力も必要だね」じゃ、それを実現するために何が必要なのかっていうふうに考えていった方が、その地域にとって楽しい、先ほど太田さんが言われてましたが、楽しい地域というのを考えた時にやっぱりそういった将来像があった上で今何をしていくべきなのかっていうのを考えた方が若い人達も関わりやすくなるんじゃないかなと思いますし、既存の活動されている方も、そういった方で今こういうことやってるし、自分はいったいノウハウを持ってるから、これを活用したいんだっていうふうな形になるのかなと、その中からなんかこう中立的なコーディネーターさんの役割、そこで今言われたゴールドシニアさんでもいいですけど、なんかメダルぶら下げてもいいと思うんですね。だからそういった流れができれば、非常に話がですね、進んでいくのかなと。なかなかこう今課題解決に向けてって考えるとうーんとなっちゃうんで、それよりも未来像を描いた上でやっていくっていう形の方がより話が進んで行くのかなっていうふうに今日感じました。以上です。

松永構成員(座長)

はい、ありがとうございます。誰も仮説に触れなかったらどうしようと思ったけど、出てきましたね。未来を語る場を作った方がいいんじゃないかっていうのは、非常にやっぱりいい考えだと思います。

他いかがでしょうか。はい、お願いします。

多田構成員

未来像を皆さんで語るのは本当非常にいいことだとは思うのですが、私は今若松の自治総連の会長をしています。それから地元の自治会長でもしています。

今私がやっているのは、今の現状問題の解決をやっているんですね。問題点を出してそこを解決しながら、先にどんどん進めるっていうやり方しているんで、仮説1のこの部分を見るとですね、なんか私的には違和感を少し感じます。もう一つが、失礼な言い方になるのですが、(仮説が)1、

2、3 あるんですけど、重要ではないか、ないか、ないか、ということは、市の方としてはこうしてほしいってなんかそんなイメージを受けるんですよ。その方向に皆さんで進んでくださいみたいな、なんかそんなイメージを受けるので、それよりも現状のですね、もっと問題点を洗い出す。今、自治会未加入が非常に多くなっている。じゃ、なんで未加入になるのかっていう、その部分が重要だと思っています。私はもう現状そこからやっているんで、自治会辞めた方、未加入の方になんで辞めたんですかっていうそこから始まっているんですね。じゃ、出てくるんでこうしよう、こうしようっていう形でどんどんやっている。それが先々の未来像に繋がっていくような気が私はしております。

松永構成員(座長)

はい、ありがとうございます。これバックキャスト型で考えるのか、フォアキャスト型で考えるのかっていうことは、実は今企業戦略でも議論になっていて世の中のトレンド的にはバックキャスティングって言われるんですよ。でも企業で一生懸命頑張っている人が何て言うかという、そんなこと言ったって目の前の課題を PDCA でずっと解決してるのになんて言われるんですよ。これはどこで折り合うのか。方向性が違う、対立しているのか。それとも視点が違うのか。どっちかという日本会社はフォアキャスティング型で PDCA を重ねて改善して、お客さんのニーズに応じて課題を解決していくのが得意で、アメリカの会社はバックキャスティングで一気にガンとやるんです。その隙間を埋めるためにイノベーションを起こすみたいなことを言ってます。30 年前は日本会社の方が正しいって言われていたのが、最近アメリカの会社の方が正しいって言われていて、時代背景なのかなんなのか。会社の話と地域の話は同じとこと違うことがあるので、一旦そういう議論がありますというところだけにしときます。また改めて皆さんご意見いただければと思います。はい。他いなかでしょうか。じゃあ、どうぞ、古賀さん。

古賀由布子構成員

はい、古賀と申します。小さなそれこそ子育てしている真っ最中の母親たちを支援する団体の代表しております。私たち、防災の啓発をよくやるんですけども、小さいお子さんの集まり、小さいお子さんもお母さんが集まりから、後はちょっとお年を召した方の集まりとか、いろんなこの属性の中で、色々ワークショップをさせていただくことがあるので、その中で結構考えることもあります。どこでも、特にちょっと高齢の、高齢っていうとあれですね、お年を召した方たちの、その集団の中に行くと、もう全然自治会に入らないから困ってるんだよかって言われて、私は自治会の方で民生委員をしているので、まあそうですね、入りませんよねみたいなことを言うんですが、お母さん達のところに行くと、「えー知らないよ町内会なんか入らない」みたいな感じに言うんです。でも繋がりはやっぱり欲しい。で、さっき酒本さんの話も私もこの太陽みたいなこの真ん中にいるっていうのはすごくいいなと思って。で、次に大熊さんが、今の組織を壊すとは言いませんでしたね。実はそうよねって思ったことが一つあったんですけど、実は若い方は若い方でまちづくりのために、たくさんいろんな動きをしているところがあるんですよ。私が住んでいる門司区は高齢化率がすごく高くて、どこの自治会に行ってももう自治会の加入率が悪いんだよ。しかも役員さんもう 75 なんかとうに超えてるよみたいな感じで言われるんですけども、その一方で、ある企業さ

ん、コミュニティナース事業というものを立ち上げて、中身はそう民生委員さんと同じようなすごく被るところがあるような動きなんですけど、その方たちが町内会の例えば一人でお店を持ってらっしゃる事業主さんとかに声をかけて、さあ、ちょっと門司をよくする会とか作ってみようじゃないかみたいな感じで集まって話したら、もうどんどんいい意見が出てきて、この人たちはこの人たちでちゃんとまちづくりについて考えています。だから既存にある団体とは違うところで、若い人たちは若い人たちなりにちゃんと考えているんだっていうのはあって、これはすごいその会議に私は参加した時に明るい未来が見えたなみたいな気持ちになって帰ったんですけど、それを私が自治会の会議でこんなことをやっていたんですよって言ったら、そんなに胡散臭いもの！みたいなことを言われてしまうし、そこのこの壁だよなっていうふうにすごく思うことがありますね。絶対いいこと、若い人中心にやっていこうっていう意見はその自治会の中でもあるのに、じゃ新しいのを持っていくと、いやそれは胡散臭いみたいに言われてしまうとちょっとなあって、どうすれば？ちょうど私はつないでいく世代でもあるので、どうすればいいのかなとよく思いながらやっています。以上です。

松永構成員(座長)

どの辺が胡散臭いんですかね？

古賀由布子構成員

とりあえず、横文字のそのコミュニティうんちゃらとかなんとかパーソンとか、だってコーディネーターみたいになると、それは一体なんなんじゃ、と。でも、まあなんとか話し始めるんですけど、それを言っているうちにそんなのは面倒くさいから、いらんみたいな感じに言われると、いつも私はシュンとしちゃうっていう。

松永構成員(座長)

なるほど。大熊さん、ばあちゃん食堂やってて、その横文字とか使わないですか？

大熊構成員

僕生粋の田舎者なんで、一応起業家ではあるけど、頭も悪いので日本語使ってます。あと僕、普段から相当数じいちゃん、ばあちゃんに囲まれてビジネスやっていますので意識的に使わないかもしれないですね。使いたくもなるけれども。

古賀えみ子構成員

私の方はですね、ご高齢者ご高齢者って言葉じゃなくて、もうシニアっていう言葉、だんだんその言葉に慣れてきましたね、もうみなさんシニアシニアって言っているんですけども。ただ、やっぱりアルファベット文字っていうのは意味が分からないんですよ。だから、雑誌作る時も極力日本の言葉で表現するように、まあシニアは分かりますけど。だから、そんなのがちょっと胡散臭いとかね。その辺の壁がね。

松永構成員(座長)

ありがとうございます。はい、他は。斉藤さん。

斉藤構成員

その地域のコミュニティの高齢化っていうのが問題になっているということなんですけど、私のちょっとイメージで申し訳ないんですが、入られている方っていうのが、一軒家に住まわれている方とかが多いのかと思っていて、実際に今は私マンションで一人で暮らしているんですけど、そういう情報とか全くないし、多分マンションの方で一人の方とかはあんまりそういうまちづくりっていうか、そういうのに接する機会がないのではないかなと思っていて、そういう方、皆さん、全世代参加型のコミュニティを作るにはそういう人たちも巻き込んでいかないといけないと思っていて、そのためにはどういう魅力があるコミュニティを作ればいいのかっていうことがちょっと疑問に思いました。すみません。私 Z 世代課パートナーズから来ています、斉藤です。

松永構成員(座長)

ありがとうございます。うんうん、この中で一番若いですね。

古賀えみ子構成員

Z 世代になりますね。

松永構成員(座長)

はい、ありがとうございます。あと勢一先生、すいません。もし、はい質問でもご意見でもあれば、いただけるとありがたいです。

勢一構成員

はい、ありがとうございます。西南学院大学の勢一です。今日福岡からで、直前まで授業と会議があって、どうしても出向けなくて申し訳ありません。準備会合にも参加してないので、初めましてで誠に恐縮ですが、皆さんのご意見からいろいろ勉強させていただきたいと思っています。

私自身はコミュニティの専門家ではないのですが、先ほど事務局からご紹介いただいた第 32 次地方制度調査会の委員でしたので、人口減少社会、少子高齢化が進む中でどのような地域社会を築くべきか、どのような課題があるかというのを、バックカスティングとして議論した経験があります。それ以外にも、色々な地域、北海道にもいろいろご縁があって、お手伝いすることもあるのですが、多くの地域を見ているので、日本全国で共通の地域コミュニティの課題をたくさん抱えている現状も承知をしています。そういう点で、私がこれまでの経験で気がついた点を申し上げますと、人口減少社会になることで出てくる諸課題は、先ほど酒本さんのご説明でも色々ご紹介いただきましたけれども、本当にこれは地域コミュニティの課題なのかというところは、少し皆さんと意見交換しながら整理をすることがスタート地点で必要なと感じました。といいますのも、子育てとか高齢者の支援というのは、そもそも社会福祉分野の政策上の問題がかなり入っていますし、ヤングケアラーなどはまさにそうだと思います。空き家問題はまちづくりや都

市の規制管理のあり方ですし、地域交通に至ってはトータルな交通政策の問題です。また、子育て世代や就労世代が地域コミュニティ参加していないようなことも、働き方や労働政策の問題と密接に関わっています。地域コミュニティは課題が多いって言いますが、そもそも国家レベルの社会政策の問題・課題か、個人レベルに落ちてきて、地域コミュニティが一番身近な存在として受け止めざるを得ないという構造上の問題があるように思います。そんな状況ですから、すべてを地域コミュニティに求めるというのはさすがに無理なんじゃないかと。そうだとすると、何をどこまでコミュニティが担うべきで、どこからは北九州市あるいは国の方が頑張るかということも、もう少し意識をするのも必要かなと感じました。そうした前提で、北九州市の市民の皆さんは地域コミュニティに何を求めているのかということ、これをおそらく事務局さんはバックキャスティングであるべき未来の姿を描いてみませんかというご提案をされたのではないかなと、感じたところです。何が欲しいのかは住民目線で住民自身のことで、しかもそれを住民が住民自治で行うという意味では、地方自治の基盤だと思います。地域コミュニティは行政に与えられるものではないし、ましては行政の下請けではないので、そこを地域コミュニティの側がしっかり決めていく。そういう会議なのかなと皆さんの先ほどの話も伺って感じました。

北海道をご紹介いただいて、北海道は人口減少社会で課題先進地域なので、学ぶところはたくさんあると思います。欧米の例も非常に興味深いですが、欧米の場合はキリスト教文化に支えられた補完性原理のもとで、一番身近なところが一番身近なことを担うのが決定権として正しく、みんなが幸せになるという発想が宗教的にあるところなので、そうしたそれぞれの地域の特色は、とても大事だと思います。そういう意味では、市民マインドご紹介いただきましたけれども、市民性とか気質は大事ですが、それがそのマインド部分だけではなくて、北九州市が築いてきた都市文化やその構造みたいなものも大事で、地域コミュニティとして集う場が必要だというご意見がたくさん出ていて、私もそうだなと思ったんですけど、北九州の場合は屋台文化とか角打ち文化とかが元々あるので、それをもっと世代間超えて広げていくのも現実的な方法かなと感じたりはしています。

また引き続き色々皆さんのご意見いただいて、勉強していきたいと思います。どうもありがとうございました。

松永構成員(座長)

はい、ありがとうございます。ちょっと予定の時間を過ぎているんです、既に。でも、せっかく北海道から酒本さんに来ていただいているので、このメンバーの話を聞いて、感想を一言をただけると、ありがたいです。

酒本氏

バックキャストとはですね、我々も多分今日言っていた、その、雲の絵がありますけれども、あれを示したのは2019年ですけども、もういろんなまちとバックキャストで考えてきましようっていうワークショップを結構やっているんですけど、結構難しいです。なので、自分ごととしてまず2040年に自分がどうなっているかっていうふうに、2040年の30代はどう考えているんだろうとか、50代はどう感じているんだろうとっていう議論をされると、少し入りやすいかなと。これ失

敗も含めてなんですけど、バックキャストのワークショップって結構大変で、なので僕らがやる時はもう 2040 年の 25、32 歳の旦那さんと 30 歳の奥様が子供一人を抱えた時に、どういう暮らしをしたいかなってかっていう議論をするんですよ。

そして、そこからこう少し組み立てていくっていうこともやって、やっとな意見が出るっていう感じがあるので、かなり自分ごととして考えていただくと少し意見が言えるんじゃないかなっていうか、ワークショップなどがいいんじゃないかなというふうに思います。

松永構成員(座長)

はい、ありがとうございます。その辺具体的に設定して、想像しやすくした方が具体的になってくるんじゃないかという話だと思います。はい、ありがとうございます。

日高構成員

すみません。ちょっといいですか。

松永構成員(座長)

どうぞ。

日高構成員

勢一先生が今言われていたこと、なるほどなと思いながら聞きながら、ただその今後の地域コミュニティのあり方はある程度、きちんとこう議論して整理すべきじゃないかというお話があったんですが、現状、正直言って地域はかなりのものを今受け持っているんですね。で、それと時代の流れから考えるというじゃ地域ができないから行政ができるんですか。という財政面含めてそれはなかなか厳しいんじゃないかと。部活動、さっきおっしゃった部活動の地域移行も新たにまた話が出てきている。先生方の働き方改革ということもあって、だから本当にこう地域が熱心にこれらの問題に取り込むと思えば思うほど、ずっしりのしかかるという部分があるんで、確かにおっしゃるようにした方が将来的にはという部分があるかもしれないけど、もうちょっと現実というか、皆さん地域の中で生活しているんです。その生活という視点をもう少し議論の中に入れていただかないと、なんか楽しい集まりができたなら、それがコミュニティかっていうのはちょっと違うんじゃないかないうふうに思いますので、今後の議論の中にその辺はぜひ。

松永構成員(座長)

はい、了解しました。

もう時間も過ぎていきますし、次回に回しますけど、ただいくつか論点みたいなものはやっぱりあって、今日の中でも少し世代間ギャップみたいのが見てきている気がするんですよ。で、大事なのは今現時点の世代間ギャップが大事なんじゃなくて、今後どうするんだ？って話だから、そこで若者ももっと地域に入れた方がいいよねというところは多分共通している。だって、2040 年はすぐです。

日高構成員

あと15年ですから

松永構成員(座長)

もう1個はですね、やっぱり新しい制度設計の必要が多分あるんですよ。いや、多田さんがおっしゃるようにね、今日の前の課題があって、これ誰かやんないといけないんですよ。ほっとく訳にはいかないんだから。それを一生懸命やって改善していくのは絶対いる。でもそれと別にどういう設計していくかがいる。僕が中学校の時にひいじいちゃんが亡くなったんですけど、お葬式は家でやったんですよ。で、近所の人みんな棺を担いでいた。今これができますかっていうと多分できない。近所ですので、女性陣は、お家でいっぱい料理を作って。40年ぐらい前はそれが普通だった。少なくとも佐賀の田舎で普通でした。でも、それが2040年ができますかっていうと、まあ、無理ですよ。じゃどういう形のコミュニティがあったらいいのかとか、どういう機能はやっぱり絶対コミュニティに残すべきだとかという議論は必要だと思います。

少なくともここではやっぱり将来の話はしないといけない。その共通点は持てきたいと思えますし、いろんな世代が入った方がいいよね、という点も共通している。そのための手段とか仕組みとか、ツールとかはここで検討していくべきかなというふうに、皆さんの話を聞いて思った次第です。

余談ですが、こないだ朝6時50分に家に電話かかってきました。お隣の方から。近所のおばあちゃんが亡くなったらしいので回覧板を回した方がいいんじゃないか、と。僕今町内会の組長なんです。でも、コロナ以降家族葬も増えているし人に知らせないでくれということも多いので、組長どうしますかって言われて、うーんじゃないですか。判断難しいし。結局ご家族に連絡して確認をとってから回覧板を作り、セブンイレブンでコピーをし、ポスティングをするということをやりました。あれ僕は大学の先生だからできたんです。たぶん自由業だからできた。だって、もうその日お通夜だから。そうすると、これみんなにLINEとかで回したら楽なんだろうなとか思う一方で、それは難しいよねとも思います。まさに目の前の課題はあって、2040年になったらどうするんだろうと。皆さんと一緒に議論しながら、なんかいい形で北九州の未来を考られたらなというふうに思っています。

8時ぐらいに終わる予定で、大幅に遅れてしまって、大変申し訳ないです。あんまりまとめにもなっていませんが、この辺は共通事項として浮かび上がってきた気がしますので、また次の議論、このさらにはその次の議論で色々皆さんからご意見をいただきながら展開できたらなというふうに思っています。では一旦ここで終わります。事務局にお返ししたいと思います。

地域振興課長

皆様長時間の議論ありがとうございました。冒頭、画面の接続が悪くてお待たせして申し訳ございませんでした。はい、今後の予定について私の方から最後ご説明をさせていただきます。資料6としてお配りしておるものに、今後の予定をすいませんぎっくりと記載をしてございます。第二回以降につきましては、本日のご議論、それから掲載のテーマを踏まえまして、また議題について設定をさせていただき、意見交換をさせて頂ければと思っております。

現状の予定では、12 月頃にまとめができればと思っておりますけれども、これについても議論の進捗を見ながら皆様にご相談させていただければと思っております。最後に事務連絡をさせていただきます。本日の会議内容につきましては、会議録それから動画として公開をさせていただくこととなります。いったん録画をしまして、公開をさせていただければと思っております。市のホームページ、それから公式の YouTube がございますので、そちらに掲載をさせていただきます。

構成員の皆様には後日会議録の確認をさせていただきますので、どうぞ協力をよろしくお願いいたします。また、第二回目の会議につきましては日程調整をさせていただいた結果、現状今ですね、5 月の 27 ないしは 28 が皆様のご都合が最もいい日程というふうにいただいておりますので、ちょっと早めに決定をさせていただいて、皆様にお知らせをさせていただこうと思います。

地域振興課長

連絡は以上でございます。はい、それでは、これを持ちまして、第 1 回北九州市地域コミュニティビジョン検討会議を終了とさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

7 問合せ先

総務市民局 地域・人づくり部 地域振興課
(電話番号:093-582-2111)